

2024 年度（令和6年度）学校評価自己評価表

一ツ橋中学校区	校番 12	福山市立引野小学校
最終更新日		2025年（令和7年）2月28日

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 めざす子ども像の実現に向け、主体的に学ぶ取り組みを確実に進めている。授業では教職員が熱意を持ち、工夫しながら全力で取り組んでいる。学校と地域とが連携した教育活動を共に進めていきたい。	児童生徒の現状 「探究的な学習」の研究を校区で推進している。『子どもの声』から『本物に触れる』『机からの脱却』を視点に持った学びづくりにより、児童生徒が自ら探究する姿が見えるようになってきた。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	「学びに向かう力」「課題発見・解決力」「対話する力」「自己・他者理解力」「自己効力感」 自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力を身に付けている。 小中合同の「自ら考え学ぶ授業」を実践するための研究授業を通して、全ての児童生徒が主体的に学ぶことができる学校をめざす。 探究的な学習の充実に向け、小中で連携して、PBL（プロジェクト型学習）の考え方を参考に、生活科及び総合的な学習の時間の単元を開発・実践する。
--	---	---	---

III 自校

ミッション 「児童が主体となる学び」を教材・児童の変容から見直し、実感的な成果や成長を児童・職員が共有できる学校をつくる。		育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)		課題発見・解決力	学びに向かう力	自己・他者理解力
学校教育目標 心豊かでたくましく 自ら考えて行動できる子どもの育成		めざす子ども像	低学年	「なぜ?」「どうして?」から問いを見出し、進んで取り組んでいる。	課題を見つけ最後までやりきろうとしている。	自分や友達の良いところを知っている。
現状 <児童> 全教育活動における課題発見・解決的な学び、自己や集団の成長を振り返る学びの充実により、自己有用感や自己肯定感が向上している。しかし、学習者として十分自立していない児童があり、少人数の活動では自分の思いを出すことはできるが、考えたことを全体へ伝える力に課題がある。 <授業> 「子どもの言葉から」を視点にし、授業づくりは広がりつつある。しかし、実を伴った学びにはつながっていない。その要因として、次のことがあげられる。 ・単元でつきたい力を意識したファシリテートが不十分 ・自立した学習者にするための手立てが不十分 今後、理論研修だけでなく、全教育活動を通して実践を通じた成果や児童の変容を共有し、教材研究を深める研修を取り入れながら、誰もが児童の成長や変容を実感する授業改善に努めていく必要がある。 授業改善を進めることが児童の「意欲や自己有用感」を育み、児童の笑顔が教師の「授業づくりの楽しさややりがい」につながる。好循環を生み出すための授業研究に取り組むことで、働きがいの向上を図る。			中学年	課題解決のための方法を考え、解決のスキルを活用して、主体的に解決している。	課題を見つけ、自分で決めたことを粘り強くやり遂げている。	自分や友達のよいところを見つけ、良さや成長を互いに認め合っている。
			高学年	課題解決のためのよりよい方法を考え、解決のスキルを活用して主体的に解決している。	課題を見つけ、様々なことに挑戦し、粘り強くやり遂げている。	互いの個性や成長を認め合い、学び合いを通して、自己有用感を高め挑戦しようとしている。
		研究	テーマ 内容等	主体的に問いを見出し、探究活動を通して、資質・能力の向上を図る 児童が学びを「デザインする」探究的な授業づくり		
		めざす授業の姿	<子どもが、問い続け、学び続け、授業づくり> ~「なぜ?」「どうして?」「やってみたいな」「伝えたいな」が生み出される学習方法の見直しと学びの過程の充実~ ○ 子どもが「なぜ?」「どうして?」と問い続け、探究する授業 ○ 子どもが学びをデザインする授業 (選択・発信・交流・改善する授業) ○ 子どもが「試してみたいな」「誰かに伝えたいな」と、わくわくして学びに向かう授業と教材の開発 ○ 子どもが自己の成長や変容を実感する授業			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立引野小学校

年目	中期経営目標	重点分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
						□指標に係る取組状況	□評価	□達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況	□評価	□達成評価	□総合評価	改善方策
1	自ら学びの授業推進	★見直し	探究学習を通して、児童の思いや発想を基盤に単元計画を作り、資質・能力の向上を図る	・生活科、総合的な学習の時間を中心に、探究し続ける単元の計画・実践 ・学びの質を向上させる教材研究・研修(評価・改善)の定期的実施	・児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価80%以上 ・年間1人1実践の研究授業の実施 ・単元末評価問題の正答率40%未満(低学年は50%未満)の児童の割合が10%以内	生活科、総合的な学習の時間が「おもしろい・成長を感じる」という項目において、肯定的評価は91%であった。 ・単元末評価問題の正答率40%未満の児童は、国語5%、算数7%であった。	3	4	・引き続き児童の思いや発想をもとにした授業を計画・実践していき、学年ごとで改善点や効果的だった手立てを考えていく。 ・プレテストなどでつまづきを把握し、学年間で教材研究を進めていく。	◎生活科、総合的な学習の時間が「おもしろい・成長を感じる」という項目において、肯定的評価は92%であった。児童自らがやってみたいことを選択し、活動していったことで達成につながった。 ◎単元末評価問題の正答率40%未満の児童は、国語4%、算数5%であった。つまづきの見られた児童には、個別指導を行い、目標をもって取組ませた。	4	4	4	・探究学習を通して、児童の思いや発想を基盤に単元計画を作ることができた。それぞれの学年の実践を共有したり、教材研究を深めることのできる研修を効果的に仕組んだりしていく。
4	自己指導能力を育む教育活動の推進	継続	HIKINO5や学校行事・児童会行事を通して自己指導的関係を育む	・児童が内容を決めて取り組むHIKINO5 ・児童の発想を活かした異年齢集団の活動の実施	・HIKINO5強化月間で自己選択項目の達成率80%以上 ・行事等の異学年交流での振り返りに自他の良さが書ける児童80%以上	・児童会考案の取組を行ったことで、主体的に生活態度を改めようとする様子が見られた。児童会による挨拶運動の達成率は、86%であった。 ・異学年交流で自他の良さが書ける児童99%であった。	3	4	・児童主体となる行動を進めたことで目標は達成できた。引き続き、児童主体となる取組を進めたい。	◎児童会による挨拶運動の達成率90%。児童主体となって、生活態度の改善を呼びかけたことが達成につながった。 ◎異学年交流の良さを実感できている児童99%。児童が交流できる機会を児童発で行い、他学年や学年間での関わり合いの機会を多くもった。	4	4	4	・教師主体ではなく、児童主体となり取組を進めたことが効果的だった。来年度以降もこの形を継続するために、教師間での意識統一と引き継ぎが必要。
4	子ども主体の健康・体力づくりの推進	継続	体力向上の自発的取り組みを通じて、意欲向上と体力づくりを推進する	・運動を楽しむことを目的とした児童主体のエンジョイ運動ウィーク開催 ・自分に合った目標設定をし、体力向上を図る持久走・縄跳びの取組の実施	・年2回のエンジョイ運動ウィーク実施 ・持久走・縄跳びの取組で、自己目標の達成率が70%以上。	児童主体の取組により、参加人数が多く、楽しんで運動に取組むことが出来た。 エンジョイ運動ウィークによる達成率82%であった。	3	3	・持久走大会や縄跳びの取組みでは、昨年度のことを想起させ、自分に合った目標を設定する。	◎持久走の取組みでは、全3回の記録のうち、自己目標を達成した児童が80%だった。なわとびウィークの取組中に自己目標を達成した児童が92%だった。保健体育委員会の児童が毎日放送で呼びかけたこともあり、自主的に運動に取り組む児童が多かった。	4	4	4	・持久走に向けたかけあしの取組は、学級によってやや偏りも見られたので教師間で意識統一を図る必要があった。6年生を中心に取り組んだことについては、成果が見られたので、継続していきたい。
1	働き方改革の推進	見直し	働きやすさを高める取組を進める	・部会等でのボトムアップを活かした業務改善 ・教材研究の時間確保と交流による内容の充実	・教師のアンケート「やりがい」「認められている実感」「挑戦する」で肯定的評価80%以上。 ・勤務外時間月45未満	・「やりがい」78.6%、「認められている」64.3%、「挑戦する」57.1%であった。 ・勤務時間は平均3.3時間であり、4.5時間を超えた教職員は教頭1名。	2	2	・校長による環境づくりが不十分である。ボトムアップの方法の見直しや、個に合った環境づくり等の改善を校長が行う。 ・勤務外時間の適正管理を継続していく。	◎各学年や各部からの意見を話す機会が多くあった。その結果、校内研修や児童会活動、行事などの精選を行うことができたと感じている職員が多い。 ◎勤務外時間の平均は2.3時間となっており、4.5時間を超えた教職員は教頭1名であった。	3	3	3	・ボトムアップによる、環境づくりの結果、教職員発や児童発の取組を行っていたと感じられた。今後も、行事や取組の精選を行えるよう、教職員間で、意見を交流できる機会を増やしていく。

[プロセス評価の評価基準]

評価	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評価	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評価	達成度	評価基準
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。